

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
2010年度



2010.12

昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

例　　言

1. 本書は、山梨県北杜市明野町上神坂1558-1に所在する諏訪原遺跡の2010年度発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、2010年8月9日から21日まで実施した。
3. 発掘調査は昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が主体となり、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会の指導のもと、昭和女子大学大学院研究生・大学院生・学部学生が参加し実施された。
4. 発掘調査は、昭和女子大学大学院生活機構研究科教授 山本輝久・同人間文化学部歴史文化学科准教授 小泉玲子が担当した。
5. 発掘調査は、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2010年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡の発掘調査を通じた体験型実習の実践」ならびに「平成22年度学長裁量研究費」により実施された。
6. 諏訪原遺跡の発掘調査は今後とも、毎年、夏季休暇期間を利用して継続的に実施する予定である。
7. 発掘調査により発見された遺物は、現在、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科において保管中であるが、正式な発掘調査報告書が刊行されたあと、北杜市教育委員会に返還する予定である。
8. 本満充概報は、調査参加学生の協力を得て出土品整理および実測図面の整理・トレースを行い、山本輝久および大学院研究生・大学院生の原稿にもとづき、小泉玲子と山本輝久がとりまとめた。
9. 発掘調査にあたっては、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会のご協力をえたほか、下記の方々からご指導いただいた。あつく感謝したい。
佐野 隆(北杜市教育委員会)、千葉 級(神奈川県立歴史博物館)、菅谷通保、大網信良(早稲田大学大学院)、石川真理子(松本市教育委員会)、植月 学(山梨県立博物館)、植月未来、中島将太(杉並区教育委員会)、領家玲美(昭和女子大学大学院生活機構研究科博士課程)、江川真滋(相模原市教育委員会)、岩井良采、井口真理子・松木小枝・結城晶子(昭和女子大学OG)

目　　次

1. 調査 経 緯	1
2. 遺跡の位置	2
3. 調査 経 過	3
4. 発見遺構と遺物	5
5. ま　と　め	17

挿 図 目 次

図1 遺跡の位置	2	8
図2 諏訪地区全体図	4	9
図3 SWU-PJ1号住 発掘現況図・PJ1平 断面図	6	12
図4 SWU-PJ2号住 4号土坑・3号土坑	13
図5 SWU-PJ2号住 発掘現況図	9	
図6 A-7グリッド1号構造遺構・SWU-P J3号住 遺物出土状態	12	
図7 SWU-PJ3号住 発掘現況図	13	

1. 調査経緯

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科は、2007(平成19)年度より、山梨県北杜市明野町上神取に所在する縄文時代中期の集落址である諏訪原遺跡の学術調査を開始した。

これまでの三次にわたる調査の結果、縄文時代中期の堅穴住居址3軒、土坑、中世末から近世期と思われる道路状遺構等が確認され、多大な成果をあげることができた。その調査結果の概要については、別に報告済み(昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科編 2007・2008・2009)があるので、それに譲るが、昨年度の調査では、とくに、B-6・7グリッドにまたがって発見された狹長な鉄平石が、石圓炉址であることが明らかとなり、住居址が存在することが確実視されたことから、この石圓炉をもつ住居址をSWU-PJ3号住と命名し周辺の調査を行った。この結果、4号土坑に検出された底部穿孔倒置深鉢形土器は、この住居址に伴うものと判断された。今年度は、検出されているSWU-PJ1号住～SWU-PJ3号住の調査の継続的調査と、昨年調査区を設定したものの、時間的関係から未調査に終わった道路側のA-7グリッドの調査を新たに実施することとした。

調査の対象地は、諏訪原遺跡が所在する上神取集落内の上神取1558-1番地(土地所有者 村田勝海)の約700m²である。この調査対象地は、かつては蚕糸のための桑畠であったが、現在は桑栽培は放棄され雑草地となっていた。昨年度の調査・埋戻し後、約1年間を経過して、再び雑草が繁茂していたため、昨年度と同様、北杜市教育委員にお願いして事前に草刈りをしていただくこととなった。

調査にあたっては、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2010年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡発掘調査を通じた体験型実習の実践」及び「2010年度学長裁量研究費」により実施することとなつた。

今年度の調査は、これまでと同様、夏季休暇期間を利用して、8月8日現地設営、9～21日発掘調査、22日撤収の予定で調査を実施することとなった。参加学生は、今年度から5月当初に参加希望者を先着順で募り、応募のあった学生を参加させることとした。また、短期間であるが卒業生も参加することとなった。宿舎はこれまでと同様に、箱崎市穴山町にある旅館「穴山温泉能見荘」とし、遺跡現地への往復には、マイクロバスタクシーを利用することとした。このような経緯を経て、土地所有者である村田勝海氏の承諾をえて、北杜市教育委員会の指導のもと、発掘調査に至ったものである。



写真1 遺跡遠景 塩川右岸から



写真2 発掘開始前の現況 2010.8.8

2. 遺跡の位置

遺跡は、山梨県の北方に位置し、山梨県北杜市明野町(旧・北巨摩郡明野村)上神取1558-1番地に所在する(図1)。標高約550m、塩川左岸の河岸段丘面に広がる遺跡で、東側には標高1700mを越す茅ヶ岳・金ヶ岳の雄大な山麓が広がり、北西には八ヶ岳山麓、南西方向には、南アルプスの山々が望まれる風光明媚な場所に位置している。これまでの調査結果によると、「茅ヶ岳山麓でも最大級の規模を誇る」とされ、「遺跡の広がりは2万坪以上におよび、100軒を優に超える住居址が埋蔵されていると考えられる」(佐野 1996)、縄文時代中期の大規模な拠点的環状集落址である。

養蚕業不振により桑の栽培が放棄され、それに変わって、畑地への転化や宅地化が進みつつあり、そうした状況の中、桑の抜根による遺跡破壊に対処すること目的として、明野村教育委員会により、1992(平成4)年から2003(平成15)年にかけて8次にわたる発掘調査が断続的に行われてきた(佐野 1996・2003・04)。

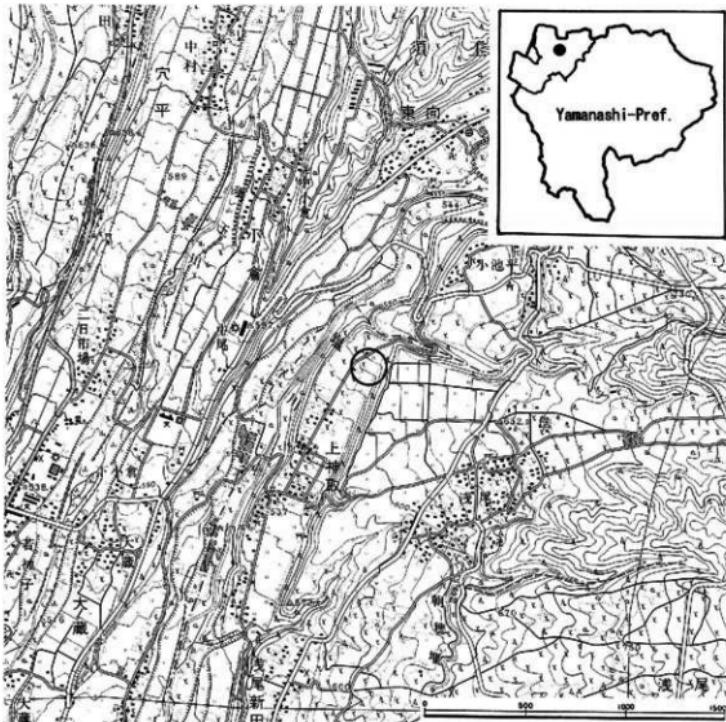


図1 遺跡の位置 1/25,000

3. 調査経過

調査はまず、埋戻し土の除去を行った後、昨年度設定しながら調査出来なかった調査区西側の道路側に沿ってA-7グリッドに北側2m、南側に3mの台形状の拡張区をあらためて設定した(図2・写真3)。また、SWU-PJ3号住の壁面を確認するため、第1次調査後埋め戻してある、C-7グリッドの北西隅を東西2×南北5mの範囲で再発掘を行った。

SWU-PJ1号住は、昨年柱穴の発掘が一部半蔵した段階で終わっていたので、その全蔵と他に確認され未調査であった柱穴の調査を行った。また、壁面の確認を継続し、とくにC-7グリッドとの境界のペルト部分の発掘を行い、南壁の確認作業を行った。また、壁面に認められた周溝の調査も行い、調査区内でのプランの全容を明らかにすことができた。

SWU-PJ2号住は、住居址内に確認されていた配石をもつ4号土坑の完掘、3号土坑内に検出された土器破片集中部の実測と取りあげ、西側に検出された複雑な切り合いをもつ落ち込みの精査を行い、ほぼ調査を完了することができた。

また、A-7グリッドに設定した拡張区では、B・C-7区に東西方向に検出されていた1号道路状遺構の続きが検出されたので、その調査を行った後、下面の縄文面の土坑状の落ち込みを確認した。SWU-PJ3号住は確認された柱穴の半蔵を行ったが、今年度の調査では全蔵に至らなかった。

調査は、前半は台風の影響から、天候は不順であったが、後半は好天に恵まれた。現状での遺構図面を作成し、全体写真を撮影後、埋め戻しを行い、今年度の調査を無事終了することができた。
(山本輝久)



写真3 発掘区の設定 写真右側が新たに設定した拡張区(A-7グリッド)

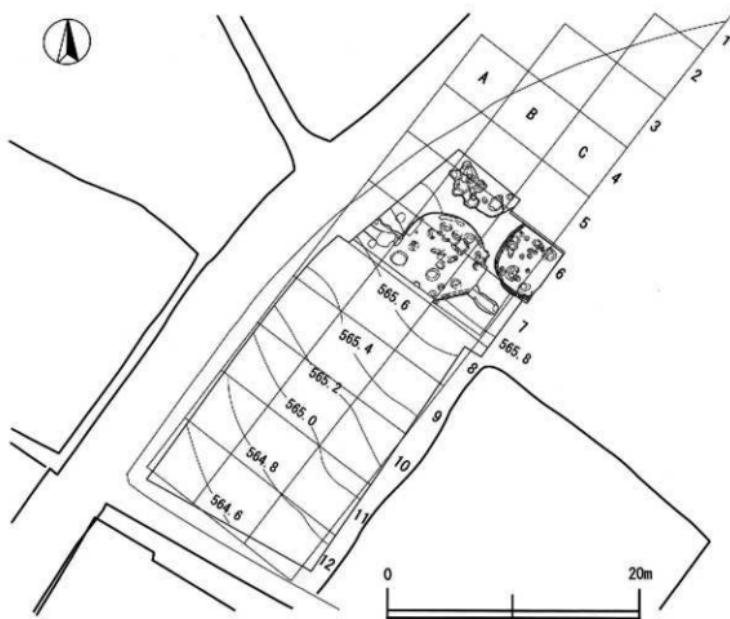


図2 調査地区全体図 1/400



写真4 調査風景

4. 発見遺構と遺物

SWU-PJ1号住(図3、写真5～7・23)

SWU-PJ1号住は、住居址覆土中に丸石などの礫等が大量に廃棄されて検出されたが、昨年度の調査では礫群の除去と、ピット等の確認及び一部の半堀までにとどまった。今年度の調査では昨年度に引き続き、住居址の壁面及び周溝等、未調査であった柱穴状の落ち込みの調査を行い住居址全体のプランを明らかにし完掘することを課題とした。

まず住居址の壁面を検出するために、C-7グリッド北側に60cm×5mの範囲を拡張し掘り下げを行い、調査を行った。その結果、壁面及び周溝、壁柱穴を検出した。拡張部を含め住居址の規模は長軸6.12m、短軸約4.5mを呈し、壁高約26～30cm、周溝の深さは約5～8cmを測る。また昨年度の調査で半堀を行ったP1～5と、未調査であった柱穴状の落ち込みをP6～14と命名し調査を行った。

ピットを完掘した結果P1は長径約1.14m×短径約1m、最深52cmを測る。ピットの東側から一部で焼土と土器が集中して出土した。勝坂式期の土器だが一部接合可能で、複数の土器からなる(写真23)。P2はP12と統いており長径約1.08m×短径約0.4m。P2は最深18cm、P12は最深42cmを測り土層は6層からなる。P2から約10cmの炭化物を検出し、P12からは焼土を検出した。P3はピットが重複していると思われるが、長径約1.82m×短径約0.82m、最深53.5cmを測り、ピット壁面近くから石棒破片が出土している(写真23)。P4は複数が重複していると思われるが長径約1.2m×短径約0.9m、最深74.8cmを測り、土器片が出土している。P5は長径約1.06m×短径約0.7m、深度63cmを測り土器片が出土している。P6～11は長径約0.4m×短径0.3～0.4mを測り、最深11～18.5cmと浅い。P7・10からは土器片が出土しているが、それ以外のピットでは遺物は出土していない。P13は長径0.46m×短径0.3m、深度20cmを測る。P14は長径0.74m×0.44m、深度44.5cmを測る。またP1・4・5は水田が隣接していることから、水が湧いてきてしまい底部の検出は困難で断念した。調査の結果、主柱穴はP1・3～5で建替を行っていると考えられる。

また住居址の北西壁面から井戸尻式の土器片が出土しており、ピットから出土した土器から判断して、本住居址は井戸尻式期に所属するものと思われる。

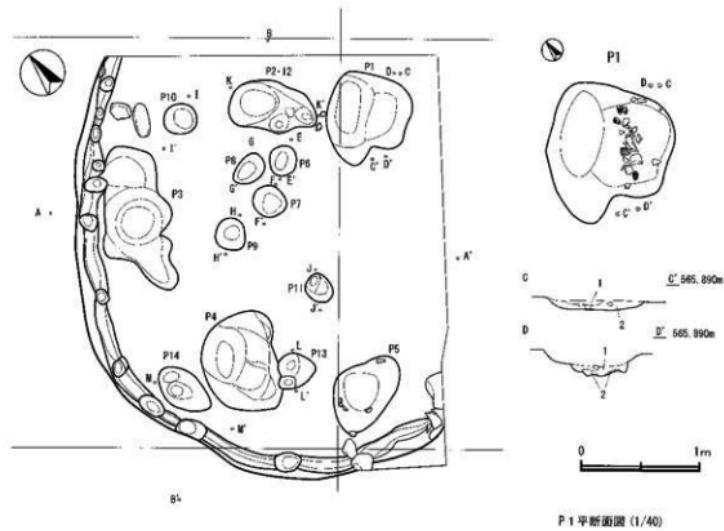
今年度の調査では、住居址の壁面及び柱穴等を検出し住居の規模が広がることが明らかにできたが、完掘に至らなかった。来年度も一部を拡張をし、引き続き調査をし完掘を目指したい。(大野節子)



写真5 SWU-PJ1号住調査風景



写真6 SWU-PJ1号住 柱穴ピット調査風景



P 1 平断面図 (1/40)

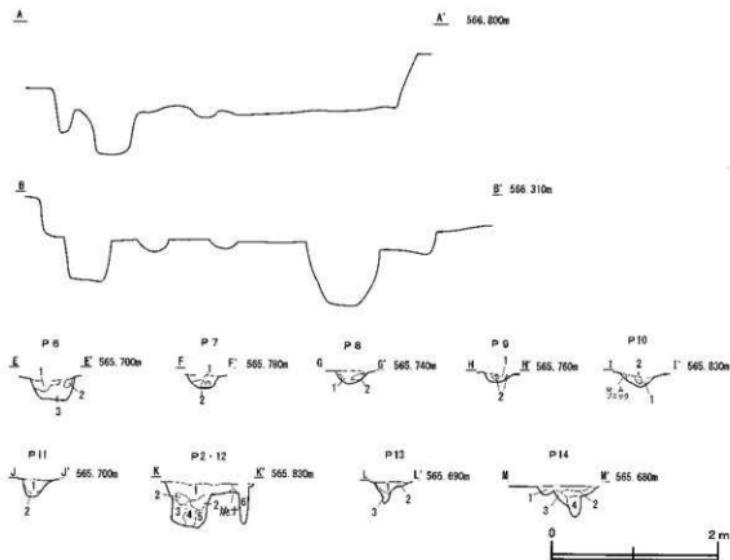


図3 SWU-PJ1号件 発掘現況図(1/60)・P 1 平断面図(1/40)

SWU-PJ1号住土層注記

P6

- 1:10VR3/3 緑褐色 1mm以下の白色粒1%含む、粘性・しまりあり
- 2:10VR2/3 黒褐色 1mm以下の白色粒1%含む、1層より粘性・しまりあり
- 3:10VR4/3 に深い黄褐色 1~2mmの白色粒3%、2層を少許含む、粘性・しまりあり

P7-P9

- 1:10VR2/3 黒褐色 1mm以下の白色粒1%、粘性・しまりあり
- 2:10VR4/3 に深い黄褐色 1~2mmの白色粒3%、1層よりしまり・粘性あり

P8

- 1:10VR2/3 緑褐色 緑色スコリア粒・白色粒1%含む、粘性・しまりあり
- 2:10VR4/4 緑色 緑色スコリア粒1%含む、粘性・しまりあり

P10

- 1:10VR3/3 緑褐色 緑色スコリア粒25%含む、粘性・しまりあり
- 2:10VR4/4 緑褐色 緑色スコリア粒5%・白色粒1%、灰化物少許含む、粘性・しまりあり

P11

- 1:10VR2/3 黒褐色 白色粒1%・5mm以下の灰化物2%含む、粘性・しまりあり
- 2:10VR4/4 緑褐色 2mm以下の白色粒2%、灰化物1%含む、粘性・しまりあり

P12

- 1:10VR2/2 黒褐色 灰化物・底土1%含む、粘性・しまりあり
- 2:10VR4/5 緑色 1~3mmの白色粒3%含む、粘性・しまりあり
- 3:10VR3/3 緑褐色 墓地土ブロック1%・黒褐色5%含む、粘性・しまりあり
- 4:10VR2/3 緑褐色 3層に隔離するが墓地土ブロックを含まない、粘性・しまりあり
- 5:10VR3/3 緑褐色 4層に隔離するが4層より堅くしまっている、粘性・しまりあり
- 6:10VR4/4 黒褐色 白色粒・灰化物1%含む、粘性・しまりあり

堆土-2:5VR4/6 非褐色 粘性・しまりあり

P13

- 1:10VR3/3 緑褐色 黒色粒・埋せスコリア粒1%・ローム混じり、灰化物を少許含む、粘性・しまりあり
- 2:10VR4/4 緑色 白色粒2%・1層を少許含む、粘性・しまりあり
- 3:10VR4/6 緑褐色 2層に隔離するが白色粒・埋せスコリア粒2%含む、粘性・しまりあり

P14

- 1:10VR3/3 緑褐色 2mm以下の灰化物1%・3mm以下の白色粒2%含む、粘性・しまりあり
- 2:10VR4/4 緑色 白色粒1%・1層を少許含む、粘性・しまりあり
- 3:10VR4/4 緑色 2層を隔離するが、2層よりも粘性あり・しまりあり
- 4:10VR3/4 緑褐色 2mm以下の緑色スコリア粒1%・黒色粒1%含む、粘性・しまりあり



写真7 SWU-PJ1号住 北側から

SWU-PJ2号住(図4・5、写真8~14・24・25・27)

本住居址は、昨年度の継続調査として、床面と柱穴等の落ち込みの確認を行った。まず、昨年度の調査で確認されたP2を、4号土坑と改め調査を行い、輪郭を確定した。長軸約1.8m×短軸約1mの楕円形を呈し、最大深度約30cmを測る十坑となった。北側に見られる深さ約50cmの柱穴状の落ち込みに関しては、柱穴であると考えられる。内部からはまた新たに井戸尻式期の上器片が出土している(図4・写真14)。また、昨年度の終わりに井戸尻式期の上器片が一括出土したP4・Bを3号土坑と改め、充掘を目指し調査を行った。長軸約1m×短軸約0.8mのやや楕円形を呈し、最大深度約20cmの十坑となった(写真10)。一括出土した土器片は同一個体ではなく、一部接合可能ではあるものの、複数の土器からなるものであった。時期的には井戸尻式期に相当する(図5・写真24)。

今年度は新たに、住居址中央にP6を確認した。長径約50cm×短径約40cmの楕円形を呈し、最大深度は15cmほどのビットだが、中央に斜縞文をもつ深鉢形土器の胴部破片が一括して出土したが、接合が不十分で埋甕のようなありかたは示していない(写真11・25)。住居址西側は、再調査の結果、住居址の半分を占める大規模なビット群となった。昨年度の調査結果を再検討した結果、一部が振りすぎと確認されたので、今年度の調査で、一部修正し、あらためて図面を作成した。ただ、ビット群の重複がなぜ生じたのかは不明である。このほか、昨年度の溝在で住居址東側に確認された落ち込みP5は、長径約90cm×短径約50cm、最大深度約20cmとなり、ビット群と重複することが確認できた。また、昨年度半蔵するにとどまった2号土坑も、充掘した結果、ビット群と重複している。この2号土坑で検出された土器は、斜縞文をもつ小形の深鉢形土器である(写真27)。本住居址の所調時期は、これまでの出土遺物から判断して、中期中葉期と思われる。

今年度の調査により、本住居址の全貌を明らかにすることができた。住居址北側は払張が困難なため調査することができなかつたが、調査の結果、東西約6m×南北約3mの住居址であることがわかった。西側には複数に重複したビットや土坑があり、東側には配石土坑があるなど、はっきりと柱穴といえるものはなく、住居址としての性格は不明瞭ではあるものの、今年度で本住居址の調査は終了とした。

(鶴田夏実)

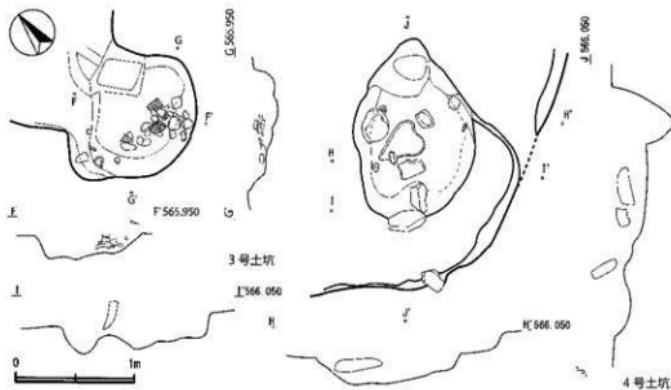


図4 SWU-PJ2号住 4号土坑(1/40)・3号土坑(1/40)

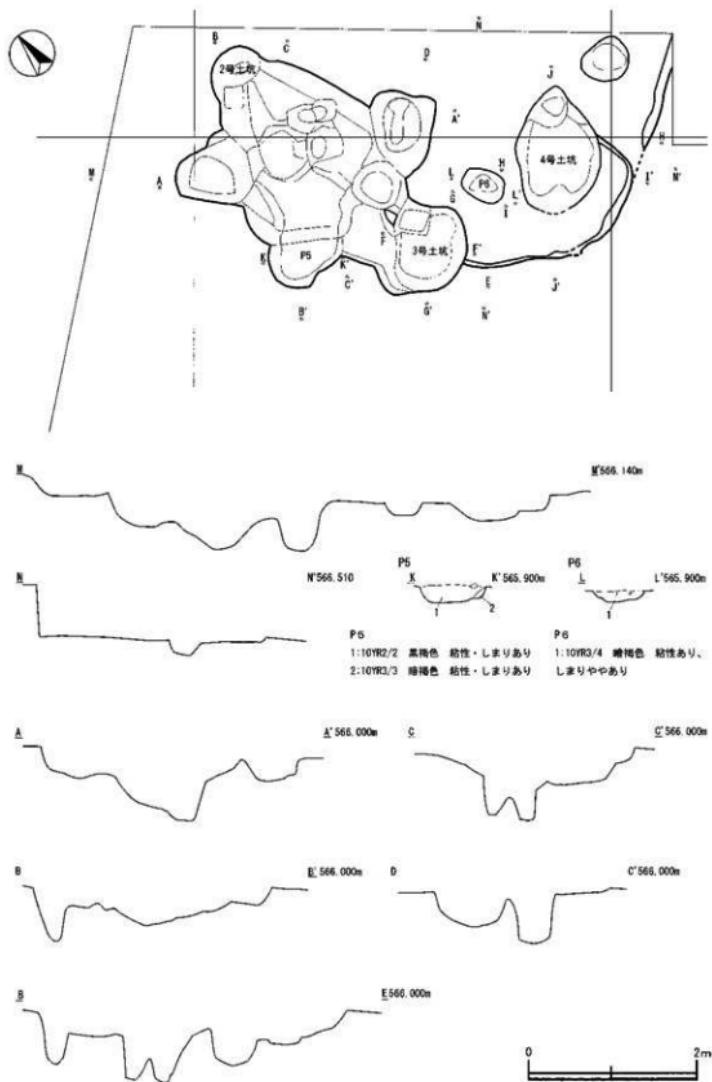


図5 SWU-PJ 2号坑 発掘現況図(1/60)



写真8 SWU-PJ 2号住 2号土坑配石面 東側から



写真9 SWU-PJ 2号住 完掘後全景 西側から



写真10 SWU-PJ2号住 3号土坑



写真11 SWU-PJ2号住 P6遺物出土状態



写真12 SWU-PJ2号住 調査風景



写真13 SWU-PJ2号住 調査風景



写真14 SWU-PJ2号住 4号土坑

SWU-PJ 3号住(図6・7、写真15~22・26)

昨年度の調査で確認された堅穴住居址、SWU-PJ 3号住のプラン全体を明らかにするため、住居内のピット及び周辺部の調査を行い、壁の確認と床面の追求を行った。昨年度の調査においてC-7グリッド北西隅の再発掘を行い、堅穴住居の壁が確認されていたため、今年度の調査では更にこの南側の再発掘を行った。その結果、南東側に堅穴住居の壁が確認された。B-7・C-7間のベルトを除去し、東南側の壁の確認と床面の追求を行う際に、グリットライン際でまとまつた土器の破片が出土した(写真18)。土器の破片のまわりに落ち込みが確認されたため、ピット内から出土しているものと思われたので、このピットをP 8と命名して後に調査を行った。その結果、ピット内から数点の土器片が出土した。この土器は列点文と沈線文をもつ曾利II式期で、2007年度に行った3号土坑から出土した土器と同じ時期に相当する。

また、住居の東側の壁の調査を行ったところ、確認された壁際の櫻上巾から、逆U字沈線の中に繩文を充填した土器(図7右、写真17・26)が出土した。時期は加曾利E式期末に相当する土器である。4号土坑山上の底部穿孔倒置深鉢形土器よりも時期が新しいので、住居廃絶後埋設されたものと思われる。

SWU-PJ 3号住内で落ち込みが確認されたピットの調査を行ったが、全戻り終えたピットは2基で、残りの13基は全戻りにまでは至らなかった。調査を行ったピットの多くが柱穴と思われる。半戻りしたところSWU-PJ 3号住の柱穴は、テラスをもつた2段の柱穴となっているものが多い特徴がうかがえた(写真22)。P 7からは石皿を作り数点の土器片も出土した。時期は勝坂式期に相当する(写真19)。

また、A-7グリッド拡張区を設定し掘り下げを行ったところ、B・C-7グリッドの東西方向に検出されていた1号道路状遺構の続ぎが検出されたので、その調査も行った(図6左、写真16)。中世から近世期のものと判断される。

来年度の調査では、半戻り終えた柱穴等の完掘及び堅穴住居の南側を拡張して壁の確認を行い、住居全体のプランを明らかにさせるとともに、石器焼成址の内部調査を実施したい。なお、底部穿孔倒置深鉢形土器を検出した4号土坑の北側に置かれた平石は精作の結果、この住居址に作成したものと判断された。(高野 舟)

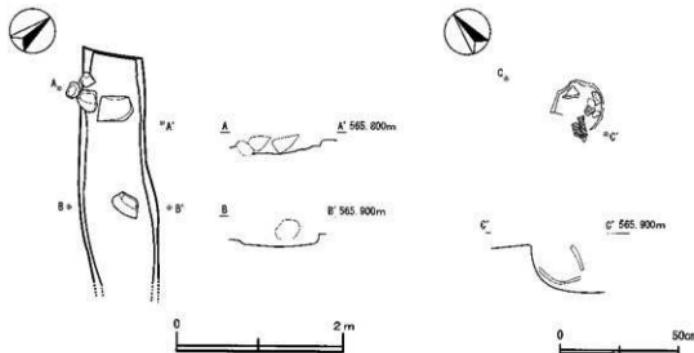


図6 A-7グリッド 1号道路状遺構(1/60)・SWU-PJ 3号住 覆土中遺物出土状態(1/40)

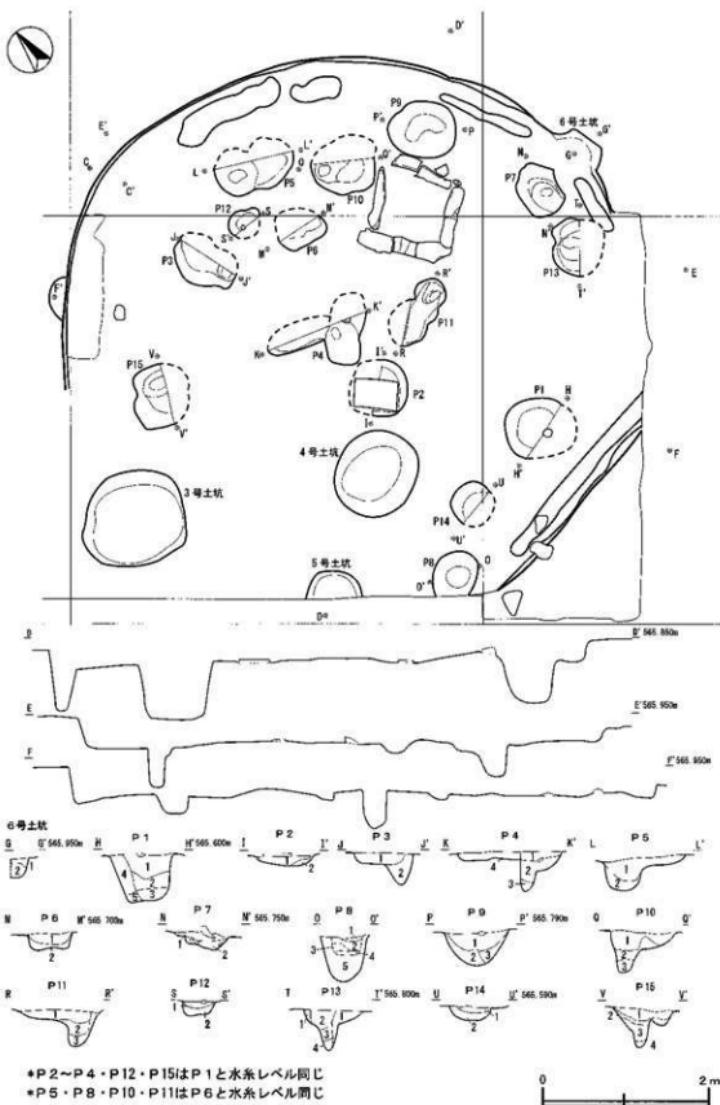


図7 SWU-PJ 3号住 発掘現況図(1/60)

SWU-PJ3号住土層記

P1

- 1:10YR3/4 棕褐色 粘性やあり、しまりあり
 2:10YR3/2 黑褐色 1mm以下の褐色スコリア粒を5%含む。
 3:7.5YR4/4 棕色 1mm以下の褐色スコリア粒を5%含む、粘性・しまりあり
 4:10YR4/4 にぶい黄褐色 粘性なし・しまりやあり
 5:7.5YR3/4 棕褐色 粘性・しまりあり

P2

- 1:10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性・しまりなし
 2:10YR4/6 棕色 粘性・しまりなし

P3

- 1:10YR3/3 棕褐色 1mm以下の1%黒色粒含む、粘性なし、しまりやあり
 2:10YR4/4 黑褐色 黏性なし・しまりあり

P4

- 1:10YR4/4 棕色 粘性なし、しまりややあり
 2:10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性なし、しまりややあり
 3:10YR3/4 棕褐色 1mm以下の褐色スコリア粒5%含む、粘性・しまりあり
 4:7.5YR4/3 棕色 1mm以下の褐色粒3%含む、粘性・しまりなし

P5

- 1:7.5YR4/3 棕色 1mm以下の褐色スコリア粒3%、黒色3%含む、
 粘性・しまりあり
 2:10YR4/3 にぶい黄褐色 1mm以下の褐色スコリア粒5%含む、
 粘性ややあり、しまりあり

P6

- 1:10YR4/4 棕褐色 1mm以下の褐色粒5%含む、粘性ややあり、しまりあり
 2:10YR4/6 棕色 1mm以下の黒褐色7%含む、粘性なし、しまりあり

P7

- 1:7.5YR4/4 棕色 粘性なし、しまりややあり
 2:7.5YR3/3 棕褐色 粘性ややあり、しまりあり

P8

- 1:10YR4/3 棕色 1mm以下の褐色スコリア粒5%、黒色3%含む、
 粘性・しまりなし
 2:10YR3/4 棕色 粘性あり、しまりややあり

P9

- 1:7.5YR3/4 棕褐色 粘性なし、しまりあり
 2:7.5YR3/3 1mm以下の黒褐色5%含む、
 粘性ややあり、しまりあり
 3:7.5YR4/3 棕色 1mm以下の黒褐色3%含む、粘性なし、しまりあり

P10

- 1:10YR4/4 棕褐色 粘性ややあり、しまりあり
 2:10YR4/6 棕色 粘性なし、しまりあり
 3:7.5YR4/4 棕褐色 粘性・しまりあり

P11

- 1:10YR4/6 棕色 粘性なし、しまりあり
 2:10YR2/4 棕色 粘性なし、しまりあり
 3:7.5YR4/4 棕褐色 粘性ややあり、しまりあり

P12

- 1:10YR3/4 棕褐色 1mm以下の黒褐色5%含む、粘性なし、しまりあり
 2:10YR3/3 棕褐色 1mm以下の黒褐色5%含む、粘性ややあり、しまりあり

P13

- 1:7.5YR4/6 棕色 粘性ややあり、しまりあり
 2:10YR2/3 棕褐色 1mmより黒褐色5%含む、しまりあり
 3:10YR2/4 棕褐色 1mm以下の黒褐色5%含む、粘性・しまりあり
 4:10YR4/4 棕色 1mm以下の黒褐色3%含む、
 3層より粘性あり、しまりあり

P14

- 1:10YR4/3 にぶい黄褐色 1mm以下の褐色スコリア粒3%含む、
 粘性なし、しまりややあり
 2:10YR4/6 棕色 粘性なし・しまりややあり

P15

- 1:10YR4/4 棕色 1mm以下の褐色スコリア粒1%含む、
 粘性なし、しまりあり
 2:7.5YR4/4 棕色 1mm以下の黒褐色1%含む、粘性ややあり、しまりあり
 3:10YR3/4 棕褐色 1mm以下の黒褐色3%含む、粘性ややあり、しまりあり
 4:10YR4/3 にぶい黄褐色 2mm以下の黒褐色1%含む、粘性・しまりあり

- 3:7.5YR3/2 棕褐色 1mm以下の黒褐色2%含む、粘性・しまりあり
 4:10YR4/4 棕色 粘性あり、しまり3層よりあり
 5:10YR2/4 棕褐色 粘性強い、しまりややなし



写真15 SWU-PJ3号住 南側から



写真16 A-7グリッド 1号道路状遺構



写真17 SWU-PJ 3号住 土器出土状態



写真18 SWU-PJ 3号住 P8 遺物出土状態



写真19 SWU-PJ 3号住 P7



写真20 SWU-PJ 3号住 石圓炉址と柱穴



写真21 SWU-PJ3号住 P1出土断面



写真22 SWU-PJ3号住 P13出土断面

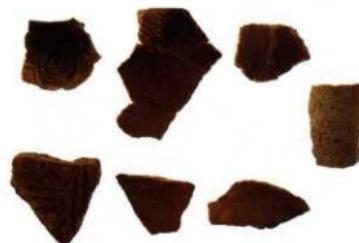


写真23 SWU-PJ1号住 P1出土遗物
P3出土遗物(石棒破片)



写真24 SWU-PJ2号住 4号土坑出土遗物

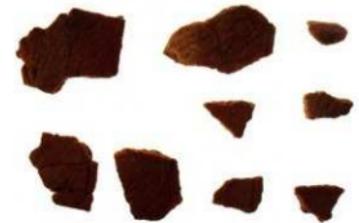


写真25 SWU-PJ2号住
写真26 SWU-P3号住 榆土中出土遗物
P6出土遗物



写真27 SWU-PJ2号住
2号土坑出土遗物

5. まとめ

諏訪原遺跡の発掘調査も本年の調査で4年目となった。毎年、大学の夏季休暇に入ってすぐに、2週間の予定で発掘調査を実施してきた。遺跡への行き帰りに2日間とされるので実働12日間という短い発掘調査期間であり、毎年の調査の進捗状況は遅々たるものである。ただ、学術調査ということもあり、毎年、発掘できたところまでで、いったん終了して埋め戻し、来年の調査に備えるという気楽さがあるのが救いといえよう。しかし、小範囲ながらも年々発掘範囲が広がることや、遺構の調査の進み具合により、埋め戻さなければならぬ土量も増えてきた。調査で排出した土砂はすべて土袋に入れて埋め戻しのさいの負担軽減を図ってはいるものの、埋め戻しに充てができるのは、調査最終日に全体の写真を撮影したあの半日程度で、学生たちも最終日の体力消耗は著しい。とくに、本年の夏は、ことのほか厳しい暑さが続き、参加した学生たちの中には熱中症にかかった者も一部出たため、健康に留意して参加途中で帰宅させたものもあった。大学での考古学教育は、遺跡の発掘調査という実践の場が不可欠である。幸い、北杜市教育委員会のご協力と土地所有者の懇切な理解があり、毎年順調に諏訪原遺跡の調査が継続してきた。今後とも調査を継続し、本学科の「手で考え、足で見る」というモットーを実践するの場としていきたいと思う。

さて、今年度の調査は、調査経緯と経過でも触れたように、これまでに検出され調査を行ってきた豊穴住居址SWU-P J 1号住とSWU-P J 2号住の2軒の継続調査と、昨年度新たに確認されたSWU-P J 3号住の調査を行った。また、昨年度設定したものの調査ができなかったA-7グリッドの東半部の調査を行った。SWU-P J 1号住は、調査区範囲内での柱穴と周構調査を実施し、図面を作成し、ほぼ調査を終えることができた。来年度は、D-5と6グリッド側に調査区境界ぎりぎりまで拡張して調査を継続する予定である。SWU-P J 2号住は調査区内での柱穴等の調査を継続し、図面を作成し、ほぼ調査を完了することができた。柱穴番号を今回の調査で変更している。SWU-P J 3号住は、すでに調査を終了していたC-7グリッド西半部を再発掘し壁面の確認を行った。また、プラン内に確認されていた柱穴状の落ち込みの半截調査を実施した。来年は、柱穴の全截と周溝、石圓柱址の調査を行い全貌を明らかにさせたい。

また、今回新たに調査したA-7グリッドからは、B・C-7グリッドに検出されていた1号溝状遺構の続しが発見され、その調査を行った。その下面を調査し、縄文時代の土坑状の落ち込みを確認している。これらについては来年度調査を実施する予定である。

(山本輝久)



写真28 諏訪原遺跡 小学生発掘体験 10.8.14



写真29 埋め戻し後の全景 10.8.22

調査参加者名簿

教 員 山本暉久(大学院生活機構研究科教授)・小泉玲子(人間文化学部歴史文化学科准教授)

助 手 石井寛子(人間文化学部歴史文化学科)

大学院研究生 大野節子(生活機構研究科)

大学院修士課程1年 鈴木夏実・高野 舞

歴史文化学科

学 部 生 4年 梶島萌・大森美子

3年 小川美保・佐藤未幸・梶間瑛美理・小林寛子・山田裕子

2年 会田彩乃・會田成美・石松 淳・石渡真弥・大和田恵・岡村 愛・加藤千尋

酒井貴美子・清水志保・杉山美里・関根 薫・高野愛弓・富田望由季・中村美紀

馬場夏希・増田静香・三田有紗・渡辺詩織

O G 石川真理子(大学院修士課程修了・松本市教育委員会)



写真30 前半参加者記念写真



写真31 後半参加者記念写真

諏訪原遺跡関連文献

佐野 隆 1996 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『年報－平成7年度－』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野 隆 2003 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古－平成14年度年報－』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野 隆 2004 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古－平成15年度年報－』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2007 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報 2007年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2008 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報 2008年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2009 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報 2009年度』

報告書抄録

ふりがな 書名	やまなしけんほくとしあけのまちかみかんどり すわはらいせきはつくつちょうさがいほう 山梨県北杜市羽野町上野取 諏訪原遺跡発掘調査概報 2010年度						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	山本輝久・小泉玲子・大野鉢子・鶴川夏実・高野 美						
編集機関	昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科						
所在地	〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7 昭和女子大学 TEL 03-3411-5373						
発行年月日	西暦 2010年12月13日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °'°'	調査期間	調査面積	調査原因
すわはらいせ き 諏訪原遺跡	やまなしけん ほくとしあけ のまちかみか んどり 155 8-1	19-209	01-014	35度 48分 2秒	138度 26分 37秒	2010.8.09 ~2010.8.8 21	約100m ² 縄文時代縦状集落址形 成過程の研究にかかる 学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
諏訪原遺跡	集落址	縄文時代	竪穴住居址3・中世道 状遺構1	縄文土器・土製品 石器	縄文時代中期の大規模縦状集落址 で、2007年度より、昭和女子大学人 間文化学部歴史文化学科が調査主体 となって、中期縦状集落形成過程 解明のため、学術発掘調査を継続し ている。本年度は、2009年度まで調 査を行った縄文時代中期の竪穴住居 址3軒の继续調査執を実施した。		



SWU-PJ 1~3号住居址

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
2010年度

発行日 2010年12月15日

発行者 昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7

TEL 03-3411-5373

FAX 03-3411-7059

印刷 野崎印刷紙器株式会社